

氏名 飯沼 珠実
 ヨミガナ イイヌマ タマミ
 学位の種類 博士（美術）
 学位記番号 博美第563号
 学位授与年月日 平成30年3月26日
 学位論文等題目 〈論文〉 書籍が建築になること—ル・コルビュジエのタイポグラフィ
 〈作品〉 建築の建築
 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	伊藤 俊治
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	飯田 志保子
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	鈴木 理策
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	古川 聖
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

ル・コルビュジエの書籍作品『モデュロール1』（1950）にあらわれた新しい建築、それが「タイポグラフィ」である。

彼はそれまでもさまざまな場で建築を定義しているが、『モデュロール1』ではあらたに「タイポグラフィ」が建築に含まれたことに、筆者は注意をひかれた。

なぜタイポグラフィが建築なのか、なにがタイポグラフィを建築にしたのか、どのようにタイポグラフィは建築になったのか、タイポグラフィが建築であるとはどういうことか。本論文はこのようなル・コルビュジエへの問いかけに、アーティストである筆者がその回答をみつけてゆく試みである。

そもそもタイポグラフィとはなにか。この語からひろがるランドスケープは、そのひとのタイポグラフィの経験によって多様なひろがりを見せる。あるひとにとっては活字そのものであり、写植作業、活版印刷、その工房の風景であるかもしれない。またグラフィックデザイン、エディトリアルデザイン、ブックデザイン、そして印刷や製本といった書籍制作を包括した概念や態度について考えるひともいるだろう。

筆者は都市景観や建造物を写真を介して取り扱い、その様相をプリントや書籍という空間に表現しようとするアーティストである。書籍と人間の活動を包括した筆者のタイポグラフィの風景に、あらたな切り口をもたらしたのがカトリーヌ・ドゥ・スメの著書『書籍の建築をめざして ル・コルビュジエ：版とレイアウト1912-1965』だ。ドゥ・スメはル・コルビュジエを「書籍の建築家」と捉え、彼の書籍作品に関する研究成果を纏めている。筆者がこの研究を知ったのは2012年頃のことであり、本論文で参照する詳細な情報はこの研究に拠るところも多い。

『モデュロール1』でタイポグラフィが建築になった、と筆者が指摘するのは、その「はしがき」におけるこのような記述である。

「建築」という語はここでは次の意味をさす：

③ 新聞、雑誌または書籍の印刷の術。

注意すべき点は、訳者・吉阪隆正が「印刷の術」とした語は、フランス語原文では「L'art typographique」だ。「印刷の術」という対訳に間違いは無い。しかしながら、ル・コルビュジェのタイポグラフィのランドスケープは、そこからはるかな広がりを見せている。本論文ではタイポグラフィという語を印刷技術のみには限定せず、印刷物の制作から流通までをその範囲として定義したい。本論文の構成は以下のとおりである。

第一章：世界の最小単位としての書籍

「この世界は一冊の書物に到達するために存在する」このシュテファヌ・マラルメのことばには、タイポグラフィの詩学が凝縮されている。一冊の書籍に縮減された世界、その書籍をふたたび世界に還元させることは可能なのか。

第二章：書籍の空間

文字とイメージということばを造形して版にする、これによって情報ははじめて印刷可能な状態になる。情報が版になり紙に刷りだされ束ねられた書籍、タイポグラフィという建築は自由な空間だ。第二章では、タイポグラフィの組成を綿密に検証した上で、情報を版にすること、世界をフラットニングすること、対象を分類し、あらたな単位を生み出すこと、イメージが版になるときに起こるこのような現象について考える。

第三章：動く建築、動かない建築

戦時中「意気消沈の状態です。何もなし。まったく何もできなかったのです」と嘆くル・コルビュジェであるが、この建造物を制作できなかった時代は、彼のタイポグラフィが建築になった重要な時代である。動く建築として書籍、動かない建築として建造物をとらえ、その相関と差異を検証する。また彼が生涯で戦時中にもみ没頭した壁画について、動く絵画としてのタブローに対し、動かない絵画としてプレスコという関係性から、絵画の建築性と比較し、書籍が建築になることの新たな手がかりを探す。

第四章：書籍が建築になること-タイプライターからユニテ・ダビタシオン・マルセイユへ

ル・コルビュジェにとって、そのペンネームの由来でもある大鴉への憧憬とはなんだったのか。それは俯瞰するまなざしであり、機械時代を象徴する飛行機のメタファーでもあったのかもしれない。書籍が建築になることを、タイプライターからマルセイユのユニテ・ダビタシオンという範囲に置き換え、彼が書籍作品で使用した図版を中心にヴィジュアル資料を多用し、そのシークエンスを追体験する。

結：建築の経験

結びの章では「建築の経験」を手がかりに、多木浩二の写真作品『未完の家』と著作『生きられた家』を参照しながら、書籍が建築であることを写真の建築性に照射する。最後に筆者の修了作品『建築の建築』の解説を添え、本論文を閉じる。ル・コルビュジェのタイポグラフィは、その詩学として、あるいは経験として建築である。このようなことへの理解が、これからのデザイン、建築、芸術分野に、あらたな可能性をあたえることを期待する。

(論文審査結果の要旨)

本論で筆者は、建築家ル・コルビュジェの書籍作品『モデュロール1』(1950)において、「タイポグラフィ」が建築の定義に含まれたことに着目した。ル・コルビュジェにこの新たな建築の定義をもたらした歴史的・政治的背景を、建築文化史および書物史の観点からその生涯と重ね合わせて読み解き、結論として「書籍は建築である」という立場で、本論を写真と書籍と建築を統合した筆者の写真实践に結実させている。

筆者はこれまでも建築を自身の写真实践の被写体としてきた。写真と書籍(アーティストブック)を用いて建築との関係性を構築するアーティストとして、筆者は本論で、ル・コルビュジェを「書籍の建築家」と捉えたカトリーヌ・ドゥ・スメの『書籍の建築をめざして ル・コルビュジェ：版とレイアウト1912-1965』(2007)、ならびに建築を経験的に捉えた批評家の多木浩二のル・コルビュジェ論を先行研究として踏襲している。なかでも本論では、建造物を記録的に撮影した建築写真ではなく、その隠喩を掬い取ろうとする石元泰博『桂離宮』(1954)や多木浩二『未完の家』(1970)の建築写真を参照し、

実際に筆者が日常的に経験してきた国立西洋美術館や東京都美術館といった上野の森の建築群を被写体とすることで、ル・コルビュジェが提唱する「タイポグラフィは詩学として建築である」というメタファーを、「書籍と建築」の関係性から「建築と写真」の関係性へと援用した論を展開している。それゆえル・コルビュジェの近代建築理論を考察した既存の論文とは異なり、本論は筆者の写真家としての関心が色濃く反映された独自の視座を獲得している。

本論によれば、ル・コルビュジェが提唱するタイポグラフィの詩学とは、彼が敬愛した詩人シュテファヌ・マラルメの「この世界は一冊の書物に到達するために存在する」（1895）という言葉に凝縮されている。これは都市建築と芸術の両領域を等価に見なし、総合的な実践を行ったル・コルビュジェの統合性を表す言葉でもある。それを本論に適応するにあたり、写真のみならず、例えば書籍と建築と音楽への援用も可能であることが指摘されたことから、「書籍は建築である」という本論の支柱となる仮定を、より多角的に検証する余地は未だ残されている。この点については、より厚みをもった結論で説得力を持たせることが望ましいうえ、また、各章が断片化していて繋ぎが円滑でない点も否めないが、写真と書籍と建築を横断する筆者の芸術実践を統合する基礎論としては評価したい。以上の理由から博士号に値すると判断した。

（作品審査結果の要旨）

通学という目的の中で日常的に現れた国立西洋美術館や東京都美術館は、不動の建築構造物というより、むしろ時間や季節によって変化し続ける存在として、上野の森の空間と混然一体となった形で経験された。「ル・コルビュジェの設計した国立西洋美術館本館」、あるいは「ル・コルビュジェに師事した前川國男による東京都美術館」といった日本建築史における重要な建築物としての意義や、既に与えられた意味に沿うように対象化することから撮影を始めたのではなかったことは、本作における写真の方向性を考える上で大きな意味を持つ。飯沼珠実の修了作品「建築の建築」に見られるハンディなカメラによる自由な構図、視点のありようを表すフォーカスの浅さ、季節のうつろいを伝える植物への眼差しなどの特徴は、伝統的な建築写真の形式にとらわれずに、建築の経験を表現することに向かう試みであることを示している。

建物自体が失われた後も、建物を撮影した写真が残されていて、その姿を伝え続けるという例は多い。その意味で写真は建造物よりも長生きであり、記録的な役割において写真は建築と共同関係を持ち得る。しかし、記録のための建築写真では外観の把握、構造的な特徴、建材の種類や質感といった項目を説明的に網羅することが目的とされ、誰が、いつ、どのように感じながら撮影したかといったことは雑情報として除外される。だが飯沼は、建造物を時間的・空間的な周縁から切り離すことなく、その存在を経験的に表そうとしている。作品に関わる考え方として、飯沼が「建築は境界であると同時に関係性である」と述べている点は重要だろう。

論文「書籍が建築になること—ル・コルビュジェのタイポグラフィ」では、建築家ル・コルビュジェが著作『モデュール1』において「タイポグラフィ」を建築の定義に含んだことに注目し、その論理を自らの建築写真およびアートブックの制作に持ち込み、実践した過程が解説されており、写真と建築との関係性の考察として説得力を持つものである。伝統的な建築写真で優先される記録情報としての役割にとどまらず、人間を介した関係性のメディアとして建築を位置付け、作品において実践していることを評価し、博士号に値すると判断した。

（総合審査結果の要旨）

飯沼珠実の博士論文及び博士展示作品は、20世紀建築の巨匠ル・コルビュジェの書籍への姿勢、その建築と書籍との関係、さらには建築を経験することの意味を、建築の写真を長く撮影してきた飯沼独自の眼差しで見つめ直し、同時に彼女の撮影した写真と制作した書籍を展示するものである。

コルビュジェが建築と共に数多くの書籍を発表してきたことはよく知られている。その中には例えば

愛犬が死んだ時に皮膚を剥ぎ取り装丁に使ったアーティストブックから、共同編集雑誌「レスプリ・ヌーヴォー」、有名な『建築をめざして』や『モデュロール1』、最晩年の『忍耐強き探究のアトリエ』まで、70冊近い書籍雑誌が含まれる。論考はそれらの書籍とコルビュジェの代表的建築を比較しながら建築と書籍の相関関係を考察しようとするものだ。

コルビュジェは1950年の『モデュロール1』で、新たに建築を定義し、「タイポグラフィ」という定義を付け加えている。つまり①家屋、②家庭、③機械に次ぐ④としてタイポグラフィ(書籍や印刷術)を建築の定義に加えているのだ。

「ル・コルビュジェのタイポグラフィ」という副題が付く本論は、タイポグラフィがなぜ建築なのかを解き明かすと共に私たちが慣れ親しむタイポグラフィ(活字印刷)という意味を超え、コルビュジェが建築に何を見出そうとしていたかを知る興味深い論考となっている。

コルビュジェが敬愛していた詩人マラルメは世界は書物になるために存在すると言ったが、書物というメタファーはコルビュジェにとり建築を設計する時の大きな手掛かりだった。建築に世界を、生活を、自然を凝縮させ、小宇宙化する。同時にそのヴァリエーションを実際の書物としても作り出す。自らをホモ・レットル(活字人間)と称していたコルビュジェらしい思考である。また活字や文字をイメージや写真とともに編集し、版面として積層化してゆく書籍の手続きは、無限にスラブを拡張し、自由な空間を構築してゆこうとしていたコルビュジェの建築思考にとって理想的なモデルだっただろう。

さらに言えば20世紀の社会、経済、政治のメカニズムもまた、書籍を生み出す資本、文化、権力の仕組みと正確に対応していた。

このような観点から本論ではコルビュジェの書籍と建築の関係の変容を検証するとともに、展示では写真で建築を経験する実践を通して得た「書籍は建築である」ことの新たな可能性を示している。建築と言語の深層関係の解明や建築と書籍の構造分析が不十分で物足りないが、これまであまり言及されてこなかった領域への挑戦的なアプローチの意欲を買い、及第点をつけた。

以上の理由から博士号に値すると判断する。